

## 戊申溜池

— 決潰とその後の歴史 —

会員 古藤田 太

鶴原善太郎・鶴原久米蔵の二人の青年は、少し小降りになつた午後二時頃、雨間をみて、今築造中の溜池を見に出かけて行つた。

ここニ、三日、台風様様の激しい雨に見舞われて、多分堤は満水であらうと思われたからである。半ば不安もあつたが、いつも大雨の後に、おたりの様子を見に出掛けるのも楽しみなことであつた。

二人が小話を交えながら、軽い足取りで坂を登つてゆくと、平素とちがう物音が、次第に高まつてくるようであつた。足を早めて堤防に着けば、今將に堤防決潰の瞬時であつた。

二人は声を忘れて、水先の宙を走つて帰つた。喜太郎さんが我が家の厩の前<sup>厩</sup>に立つと、早や濁流の水先は足を洗い始めた。前の道に馬を引き出せないと思つたので、裏手にひいて行こうとしたが、平素でも無理なものであることに気が付いて、断念するより致し方がなかつたので、馬を放つて逃げ出した。

（以下は鶴原スナさんの話である。）

末世の棟相とて云うか、悲鳴と喧嘩の物音が雨の中に起つてきた。私は大雨続きに溜池決潰の予感でも感じていたのか、その頃厩に産んでいた二匹の猫子と、雞小屋の三羽の雞を、雨の中を山手の金比羅さんに移

していたが、急に聞えてきた悲鳴に、我が家に走り帰つて驚いた。先ず仏壇の位牌を取り出したと思つたが、すでに家の中はヒタヒタと水が溢れてくるので、夢中になつて逃げ出した。

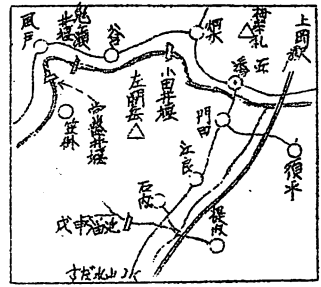
ふと振り返ると、今倒壊した向うの家<sup>いざし</sup>の厩に登つた隙が、なきまがら流れてわくわくが見えた。押し寄せる水勢はますますまじく、三十分そこそこと思われ短時間であつたが、夢中の時間であつた。

この短い時間には、小野弥七・松岡与三郎・小野ミヤ・松岡茂市・鶴原善太郎・鶴原栄作・鶴原久米蔵さんの七軒は、厩もろとも倒壊して流失のかたちとなつた。鶴原兼吉・小野伸吉さんのように、厩だけ流失した者もあつた。先刻堤から走つて帰つた善太郎・久米蔵両青年は揃つて馬を喪つたが、善太郎さんは悲痛なことには、其の上父親方太郎さんを水死さす羽目になつた。

かてて知えて、大切な田畑は敷所歩の河原と化したのである。誰一人想像もしなかつた溜池決潰という恐ろしい魔の瞬間が、狭いこの平和な石内部落の里を襲つたのである。

時は、明治四十二年八月六日のことであつたが、鶴原スナさんは當時を追想して、筆者に以上のように話してくれた。

弥生町内の灌漑施設は、元禄四年（一六九〇）の小田井路・宝永三年（一七〇六）の鬼ヶ瀬井路、文政元年（一八一八）の常盤渠とならんで、この戊申溜池の四つであるが、戊申溜池を除く三工事は、佐伯藩の直営工事か、佐伯藩の援助によつて完成したものである。勿論地主民の血と汗の奉仕の結晶であつたが、何んといつても、早くから豊富な番五川の水を引き入れて、永くその恩恵を蒙っていた。



て、二十四町歩の新田津苗の畑には、雑穀が植え続けられていた。

秀吉の太閤検地（天下丈録）の頃（一五九〇年前後）以来、寸べての田畑は六尺三寸一間の計算で正確に測られ、米の法定石高で年貢が強制された。しかもそれは、收穫高の三分の二以上の苛酷なものであつて、年貢は米が大豆に限られたから、我々の祖先は、言語に絶する苦しみの生活を続けただのである。

明治になつて野稻（陸稻）が普及して、多少作物は賑やかになつたが、維新以来この新田津苗には、主として夏作に粟や藪（雑穀）と作られる家が三軒も残っている、冬作には麦が植えられるようであつた。

この米に縁うすい畑作地帯が水田と化し、米が餘ると考へた人はかつて無かつたのである。他の部落に比べ極度の米穀不足の苦衷を察して、切畑村長安達平太郎氏は村長就任以来、平岡京依・鶴原米蔵・近藤吉五郎等有志と謀り、溜池築造の計画と樹てて地区民の承認を求め、開墾地又民挙げての協力の元には、明治四十二年四月十日起工の運びとなつた。そして夏台風の襲来で、不幸にも前記八月六日の決潰を招いたものである。

工事は未だ半成に達せず、漸く錆びついたばかりで、

とこもが、戊申溜池は地区民が之上り、自分たちの力によつて築いた灌漑施設であつた。

このあたりは部落の古い祭神の起源は判らないが、堤内部落にある志永二十二年（一四一五）の宝篋印塔から、室町初期には既に存在した部落であつたと思われる。以米約五百年間、平の前也迫田を除いて、

地の深まりは二割程度とみられていた。天災か、人災か。これは当時議論のあかるところであつた。被害の慘禍は石状しがたいものがあり、直接被害を蒙つた地区民と中心に、また一般の人の中からもこの声に和し、当局者を怒鳴攻撃する声も高まり、一時は築入地す術ない有様であつた。

安達・平岡・鶴原・近藤の諸氏は、夫々昼夜の別なく東奔西走して、地区民に工事施行の利害や、低利資金借入に付いて説得を続けた。地区民の納得を得るまでの苦勞は大変なものであつた。

しかし、遂に新しい水田の實現と祈つて工事が再開されることになり、被災者の救済もでき、技術者も瓶口技師に替つて、経験豊富な吉田伊三郎技師が招聘された。そして工事は、新しい意気込みのもとに、明治四十三年十一月二十一日に再開された。

男も女も手織りの縮み綿の長着やシヤツ姿、姉さんかぶりや鉢巻の甲斐がしいしい働き振りで、砂洗い作業、セメント板り、粘土搦き、モッコウカフとびといった作業は、男女は分れて稽を出す。

中でもひときわ自立つ女の調取りは、祇園から通つた佐藤ナツコさんで、立派な体格をいかして、五十貫のセメント樽を軽々と運んだ。男の旗頭は右にし負う堤内の又見涼次郎さんで、堤内の愛宕神社の石燈籠一基を背負つた程の力自慢であつた。

出夫のそれこれに、

『戊申溜池吉田に給る稲の暮いぞ』

と書いた梁抜きの手拭が配られて、堤の粘土をつきつき、この唄がはめされて、男女の嬌声と共に谷々ばこだました。人一倍の働き手には、等級に別けて白・青・赤の袴

が配られ、増歩がついた。当時の債銀は、一日男三十銭、女十五銭、増歩はこれに割増しされたのであった。石工は腕利きの仲谷幸吉さんで、東上浦（現上浦町）の浪木から来ていたが、其の仕事振りは今日まで語り伝えられている。工事は同じ上浦の曾根幸吉組の二十名程の土工が、主力となつて働いていた。

經費がかさみ、工事が長引いてくると、さすがに倦怠色が目立ってくる頃、「この小部落と見殺しにするな」の声が、佐伯の全威に澎湃として起り、下切畑・直見・上野・中野・明治・川原木・鶴岡、遠くは厨尾・青山の村々から土、弁当持彦で五十人、八十人と、土煙を上げながら強んと毎日のように加勢が押し寄せた。隣人の温かい気持は決して忘れてはならない語り草である。

この加勢は、地元民の奮起は目ざましく、作業はにかかれば活気づいて、さすかの工事も終りを迎え、明治四十四年六月六日、溜池、水路とも同時に完工に至った。名づけて『戊申溜池』と呼んだ。

溜池築造費は、二万八千六百五十八円、井路開鑿費に四百七十一円と費したと、当時の記録は語っている。

其の後、昭和七年十一月溜池内面掘取工事と幹線水路の工事を行い、更に昭和八年、九年の二か年の継続事業として、水路二千六百七十四間の延長工事を行い、その八割はコンクリート張りを実施したものである。

戊申溜池工事の状況については、尾岩の安達忠弘氏宛に保存されている、決潰後の工事絵図が遺されているばかりでなく、安達村長と共に工事の推進に当たった近藤吉五郎氏が、「戊申溜池由来」を大正四年に、新修詩調に載っているのが現在残っている。

この地及最大の事業であった溜池工事は、戊申の年明治四十二年に始められて、三年の歳月を経て完成したが、何よりも先づ計画推進に積極的に取り組んだ先人の功績を讃えたい。戊申溜池こそ、限りない恩恵をこの地に遺してくれたものと謂われはならない。

(終)

記録

わがふるさと、元田誌、

— 学校の歴史と火災や伝染病 —

会員 市野瀬 仁

大間小学校百年の歴史の概況

「明治七年十月一日、元田に大間小学校が創立してから、既に百年の歳月が流れました。十年一昔と云いますから、此の間、宮の下に移転して再び元田、そして現在地へと幾度も変遷もありました。

初代小幡校長より、二十九代現在の宮原校長に至る二百数十名の教師を迎え、同窓生も三千四百有余名に及んでいます。荒廢した校舎とはいえ、永い百年の風雪に耐え、有為の人材を多く社会におくり出し、現在、教師・児童・園児、百数十名、僅かの期間、彼々として教育を続けておられます。

同じ運命にある兄弟校と、永年待ちわびた統合、合併が、奇しくもこの百周年と期して成立に至った事、